

# 琉球大学学術リポジトリ

## 琉球列島における板鰓類に外部寄生するウミクワガタ類幼生の分類学的重要性

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム 公開日: 2009-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 悠造, 広瀬, 裕一, Ota, Yuzo, Hirose, Euichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9827">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9827</a>

琉球列島における板鰓類に外部寄生する  
ウミクワガタ類幼生の分類学的重要性  
(The taxonomical importance of gnathiid larvae (Crustacea, Isopoda, Gnathiidae),  
ectoparasites of elasmobranches from the Ryukyu Archipelago)

太田悠造 (Yuzo Ota)<sup>1</sup>・広瀬裕一 (Euichi Hirose)<sup>2</sup>

<sup>1</sup>琉球大学大学院理工学研究科海洋環境学専攻、<sup>2</sup>琉球大学理学部海洋自然科学科

甲殻亜綱の1科であるウミクワガタ類は、ダンゴムシやオオグソクムシなどが含まれる等脚目である。ウミクワガタの成体が海底で何も食べずに繁殖のみを行う一方で、幼生は魚類に外部寄生して吸血する。このように生活様式が極めて異なる幼生と成体は形態も大きく異なる。そのため、等脚類の中でも極めて特異的な分類群である。

これまで、ウミクワガタ類の記載分類は、クワガタムシのような頭部を有する雄成体の形態に基づいており、幼生の形態には種間でも大きな差異はないと考えられていた。その結果、幼生の形態記載は疎かにされがちで、幼生個体だけをもとに種を同定することは極めて困難である。しかし、ウミクワガタ類の雄成体が海底から見つかる場合よりも、幼生が魚類から見出される場合が多い。そのため、魚類の寄生虫としてウミクワガタ類が研究されることはあっても、ほとんど種同定は行われてない。

2005年から、我々が沖縄島や石垣島で混獲されたエイやサメ（板鰓類）の鰓室や口腔に寄生していたウミクワガタ類の幼生*Gnathia* spp.を調査したところ、形態からに区別できる8タイプの幼生が見出された。これらは一見して胸部のカラーパターンやプロポーションが異なっていた。各幼生タイプを区別して飼育を行ったところ、タイプごとに形態が異なる成体を得られ、このうち7タイプが未記載種であることが明らかになった。今回の板鰓類に外部寄生するウミクワガタ類では、分類の基準となる雄成体はどれも長い剛毛に覆われ、大顎の形状も似通っており、頭部前縁の突起や口器の形状で種の区別をされるのみであり、むしろ幼生の方が形態による区別は容易である。ウミクワガタ類では雄成体のみならず幼生形態も記載することが、幼生の種同定を可能とするためには不可欠である。また、グループによっては幼生形態が、種分類においてより重要であるかもしれない。